

☆10月・11月・12月・1月・2月の活動☆

採集観察会のお知らせ 埼玉県入間郡日高町 「巾着田」

採集観察会 第3回 10月13日(日) 10時 雨天決行

第4回 2月19日(日) 10時 雨天決行

集合地点: 西部池袋線「高麗(マ)」駅 改札口 巾着田までは徒歩10分

駅前に適当な弁当屋さんがないので、昼食を御用意下さい。

世話人は平松毅久 (TEL 0492-33-8792)

合同例会の案内

期日・所 12月1日(日) 午前10時開会 会場 駒場住区センター

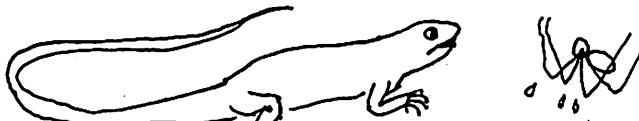
講演と懇親会 (多足類懇談会と合同で行います)

世話人は熊田憲一 (TEL 045-413-3375)

同封の葉書で出欠・近況(通信に掲載することあり)をお知らせ下さい。

『アコウ』 小学校時代の娘あがさの自由研究

宮園真理子



娘のあがさは、怪獣→恐竜→ハ虫類と、生後8ヶ月から一貫して、あのテのものが好きでした。はじめてニホンカナヘビが家に来た日には、私の方が熱を出してしまいました。それでも、『ヒルの採集と実験』(小学3年時)よりましたので、許してしまいました。

『クモの歩脚の実験と筋肉について』は、たまたまユウレイグモの脚をちぎったら、いつまでも動くのが不思議ではじまりました。いろいろなクモの各歩脚でためしてみたのですが、たくさん採れるので、ジョロウグモにしました。はじめは各節をピンセットでつまみ、どの位の時間動くのか、また開く角度はどうかなどを調べました。クモにも筋肉があるのではないかと考え、スポーツ医学の本などで、まず人間のものを見ていきましたが、参考書を動物園の高家博成氏に教わりますと、これもまた先駆者がいて、ガッカリでした。もっとも、めげずに夜中の一時になんでも顕微鏡をのぞいていました。

その前年は『ニホンカナヘビとアオカナヘビの比較』でしたが、その研究の中に採れるだけ採ったクモをヘビに食べさせて、好むかどうか、食べるかどうかという表があります。色によって、あるいは大きさによって、いろいろ面白いことがわかり、これは一度皆様にもお聞きしてみたいものと思っています。また、クモによって自切する脚がきまっているという勝手な仮説についても、ウソかマコトかたしかめてみたいところです。エサ用クモなど、談話会の皆様のひんしゅくをかうのではないかと恐れる私は、なかなか本人を入会させることができませんでした。娘は「入りたいよー」と2年間、言い続けていました。(このたび娘さんも入会された。編集子・池田注、以下※)

昨年は『トカゲモドキのストレス』。夜行性なので、人間の方が睡眠不足で大変でしたが、私はよくまあ5年間、毎年毎年、始業式の9月2日まで、次々と思いついて、徒労の日々を送るものだと、あきれています。たまたま、学校が、個性を認める(助長させる?)ところだったので、幸か不幸か、受験はどこかへ飛んで、すくすく異色の道を歩んでいます。4月から中学校です。今度はまたちがう学校へ入りましたので、今後はどうなるでしょうか。

一度観察会に参加させていただきたいと思っています。 (4月7日)

《採集観察会の中間報告》 第1回と第2回 巾着田 採集観察会 平松毅久

5月19日（日）曇り、時々晴れ。空は五月晴れという訳にはいかなかったが、幸い雨は降らず、91年度談話会採集会はスタートした。私は小峰氏の奥様の手による談話会の美しい懇（のぼり）を、まるで応援団の団旗よろしくうれしげにたずさえてさっそうと歩いて巾着田の入口まで来たのは良かったが、待てど暮らせど後続集団が来ない。一時は冷汗をかいたが、30~40分遅れて後続集団が到着。話を聞けば、途中の茂みで採集に熱中していたとのこと。巾着田では、前半は草原、後半は林の中での採集となつたが、前半はナガテオニグモ、コモリグモ各種、後半はコケヒメグモ、キレフハエトリ等が目だった。しかし、何よりの収穫は数年前迄KISHIDAIAの編集を担当され、談話会の中心メンバーとして活躍されていた嶋田順一氏が久しぶりに顔を出されたことだ。お店を出されたため御多忙のことだが、是非これを機会に採集会等にも出てきていただきたいものである。なお、採集会のあとは西武線元加治駅近くにある嶋田氏のお店で盛り上がったのは言うまでもない。

参加者（敬称略）：浅間茂、池田博明、井野文雄、大石征夫、笠原喜久雄、加藤むづみ、木村知之、熊田憲一、佐藤幸子、嶋田順一、新海明、鈴木成生、高橋登、谷川明男、長井芳夫、平松毅久、布施佳子、古浜隆、本木洋子、山川守（20名）

仮目録（略号；M=雄成体、F=雌成体、m=雄幼体、f=雌幼体、e=卵のう、y=雄雄不明幼体、-=未確認）  
 シグモ(-), ミヤグモ(F), オオヒグモ(M, F, f), アシクトヒグモ(F), ハラキヒメグモ(F), ヒルヒメグモ(F),  
 コヒメグモ(M, F), カホシヒメグモ(F, e), ヤボシヤヒメグモ(F), シロカネイソウグモ(m, f), アオイサウグモ(m),  
 オカガグモ(F), ウカネグモ(F), ヨアリミシソグモ(F), ユリマツラグモ(F), オングモ(f), ヤマヨヒグモ(f, y),  
 カラフトオニグモ(F), ヤミロヒグモ(M, F, f), ヌタオニグモ(y), トトヨウニグモ(M, y), ナガテオニグモ(F, e), スクロオニグモ(y)  
 ハリケグモ(f), シロシジョウソウグモ(y), チュウカタガネグモ(f), ゴミグモ(M, F), ヨツコミグモ(M, F),  
 キンメッキヨミグモ(M, F, y), カラスコミグモ(f), アシカガグモ(F), ゴロカネグモ(M, y), キラテロカネグモ(y),  
 カコアシナカグモ(M, F), トカラリシアカグモ(F), ヒラタグモ(y), クサケモ(y), コクサグモ(y), シモフリヤチグモ(F),  
 ハタケグモ(F, y), アズマキシダグモ(M, F), イオウロヒリケグモ(y), ハリケモリケグモ(M), イタハリケモリケグモ(M, F),  
 ヒハルモリケグモ(F), カイイクモリケグモ(F), サケモ(f), ネコグモ(-), カバキマチケグモ(m), ハアカブクログモ(y),  
 ヒメアラグモ(M), トビイロアラグモ(F), オヒメグモ(M, F), ヒメグモ(y), アヒエヒグモ(-), キタエヒグモ(M),  
 ワカバグモ(M, F), ヤミロヒグモ(y), トラフカニグモ(y), アズチグモ(y), キワリエトリ(M, F), チャロアヒルエトリ(y),  
 メシソルエトリ(f), イケスマリエトリ(F, y), モンショコゲチャリエトリ(-), ミシソルエトリ(y), テニッカリエトリ(F),  
 マミソルエトリ(F), シンソルエトリ(m), カバソルエトリ(f), アリグモ(M), タイリケリグモ(F) 72種

7月14日（日）雨のち曇り。誰かの行いが悪いせいか、久しぶり（私にとっては初めての）の雨の採集会となつた。きわめて精神年齢の低い私は懇（のぼり）を持つのが嬉しくてたまらぬかのように見えたのであろう、見かねた池田氏が「もうたんたら」と忠告（？）する一幕もあった。前回の事があるので、ゆっくりと後続集団に合わせて道草を食いながら行くことにする。シロカネイソウロウグモの銀色の腹部が雨に光って美しい。桑の葉の裏にはトリノフンドマシの雌成体がいる。しかし、皆の目を引いたのは近年激減しているコガネグモの立派な雌が造網しているところであつたろう。ちなみにこのコガネグモ、帰りに見た時にはもうおらず、採集した犯人は誰だとそれぞれ痛くもない腹を探り合つたことである。哀れなコガネグモは誰につかまつたのか、それとも危険を察知してお隠れあそばしたのか、いまだに謎である。採集の方は前回卵のうを作っているのを確認されたナガテオニグモの雄成体が見つかり、トリノフンドマシ類はトリノフンドマシ、オオトリノフンドマシに加えて、新海明氏の奮闘により、シロオビ、クロの以上、4種が採集された。加藤さんはオオトリの腹部の眼状模様の周りで体液が循環しているのが透けて見えることに興味をそそられたらしい。クヌギの木にカブトムシがいるのを笛岡氏が見つけて人垣が出来た。まさに夏休みといった趣である。種類数はいま一つ伸びなかつたが、「薬をまいしているのでは」という高橋氏の一言は真偽はともかくとして心に引っかかった。

参加者（敬称略）：阿部代始子、池田博明、笠原喜久雄、加藤ひづみ、熊田憲一、佐藤幸子、笠岡文雄、新海明、高橋登、田副幸子、谷川明男、中島晴子、長井芳夫、平松毅久、古浜隆、本木洋子（16名）

### 仮目録（略号は上に同じ）

シゲモ(M,y),マネキモ(F),エレイクモ(F),マツエンマグモ(y),オヒメグモ(F,y),カガヤヒメグモ(F),  
オオツリガネヒメグモ(F),ヒゲモ(M,m,F,f),ヤホンザヤヒメグモ(F),シロカネイリカウケモ(M,F),アオイカウケモ(F),  
ワナカイタウカウケモ(M,F),ヤリケモ(y),オカカグモ(F,y),キヒメグモ(F,f),コヒメグモ(F),ヘリシロサラクモ(M,F),  
ノコギリビサケグモ(M,F),ハケシケグモ(F),チビアガラクモ(m),オサガガムネグモ(F),コシケヌカグモ(M),オケモ(f,y),  
ビシジョニグモ(f),コゲチオニグモ(y),ヤマシオニグモ(F),対オニグモ(F),トヨオニグモ(F,f),イオニグモ(y),  
サアマノミタマシ(F),ワキシロアマノミタマシ(m,f),ナガテオニグモ(M,F),シロシニショウシヨウグモ(y),カガコガネグモ(M,f),  
コカネグモ(F),コガクガネグモ(y),シヨロウグモ(y),トリノンタマシ(f),オトリノンタマシ(f),シロヒトリノンタマシ(f),  
ケトリノンタマシ(f),ゴミグモ(F),ヨゲンミグモ(y),キソシキコミグモ(M,F,m,f),ヒタケグモ(F,y),  
キラシロカネグモ(F),ウコアシカネグモ(M,F,y),アシカネグモ(M,F),ヤカタアシカネグモ(M,F),シコアシカネグモ(M,F),  
ヒタケグモ(F,y),クサケモ(M,m),コクサケモ(f),ハタケグモ(F),クラーコモリグモ(y),チビコモリグモ(M,F),コガタコモリグモ(F)  
イケタリケモリグモ(M),ウツキモリグモ(M,F),キハモリグモ(M),サケモ(F),カバキマチグモ(F,e),  
ヒメフクログモ(M,F),オヒメグモ(F),シオグモ(f),メリケグモ(F),ハナグモ(M,F),コケグモ(F),セマルトラカニグモ(F),  
ヤミ仰角カグモ(F),オヤミ仰角カグモ(M),ヤマトヤカリケグモ(y),キヒグモ(F,e),ネコヒトリ(y),ワカバネコヒトリ(M),  
マジロエトリ(M),オスカバエトリ(M),アリケモ(F) 81種

### 《福島県裏磐梯合宿》 私にとって初めてのクモ 鈴木成生（東京都文京区）

今年から採集会に参加の初心者で、今回初めて観察し得たクモの種名を記録しておきました。夜間採集は初体験でした。所用のため、五色沼散策がかなわず心残りでしたが、取れ立てのじゅん菜と戻出しの喜多方地酒の差入れは、補って余りあるものがありました。幹事はじめ皆様のあたたかい御指導を感謝いたします。私にとって初めてのクモを記録してみました。〔 〕内は今回初めての種ではありません。

7月27日（土）午後 晴 小野川湖 ナムラオニグモ, カバキマチグモ

〔オニグモ, トヨオニグモ, スクロオニグモ, ハマキフクログモ, ヘリシロサラクモ, アシカネグモ〕

夜 晴 国民休暇村近辺 カガネアヒトトリ, ホガシミシングモ, ムラホシオニグモ,

アカヒメグモ, アシカサラグモ, キヨウグモ

〔ハナグロヒメグモ, カゲヒメグモ, ヒロヒメグモ, ハラキヒメグモ, コニグモトキ, コケグモ, ウツキモリグモ  
キソシキコミグモ〕

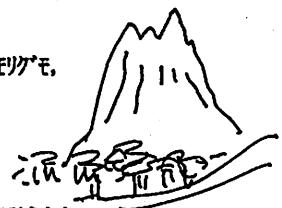
7月28日（日）午前 雨 曽原 フシグモ, ヨホシシクシグモ, キシルエトリ, セマルトラカニグモ

午後 曙 磐梯山麓（国際スキー場入口） タカヒメグモ, ヤマリケモリグモ,

シマアカリグモ, ヤマサグモ, マダラシジリエトリ, ハモシビグモ, ハシロナシキグモ

〔スジシャコグモ, ハナグモ〕

\*熊田氏同定による



初めて合宿に参加して

阿部代始子（千葉県千城台）

合宿は初めてで、恐る恐る参加させていたいたのですが、皆様懐が深くて、足手まといになるのではとの懸念は取り越し苦労でした。

また、皆様親切に教えて下さるので、硬化した頭ですが、覚えなければ申し訳がないと一生懸命努力したのですが。

民宿の御夫婦の御人柄やまわりの豊かな昆虫にも感激し、虫仲間に話したら、たちまち来年、蛾の夜間採集にということになりました。

民宿の小さな流れにいた黒いトンボはハグロトンボでした。アオハダトンボの♂も黒いのですが、こちらはごく局所的にいて、普通はハグロトンボと思ってよいとのことです。

また、近くでハンノキを食べていた巨大なイモムシはオナガミズアオでした（すぐ齧を作りました）。関東地方では浦和から報告があるだけ、これも局所的のこと。羽化しても相手がいないのでは、展翅して博物館にと思っています（越冬しそうな気配ですが）。

トゲトゲのある草はカラハナソウでした。初めて見たのですが、関東地方中部地方以北の温帯植物とのこと。もう一つ分からなかったのはヤマハコでした。（1991年8月21日記）

「夜」との出会い 中島晴子（東京都目黒区）

昨年に続き、二度目の合宿参加です。私にとっては、自然について自分がいかに貧しい知識しか持ち合わせていないかということに改めて驚く機会であると同時に、その驚きが楽しさにとって代わり、充ち足りた気分にさせてくれる希有な機会とも言えます。

そして、何よりすばらしい「夜」。私達の日常では、電気の明りで暮らす時間帯の呼び名でしかなくなってしまった「夜」。でも、去年もそうでしたが、合宿では正真正銘の「夜」と出会えるのです。「夜」の息づかい、「夜」の匂い、「夜」の声、「夜」の色……。ひんやりとした夜の流れに、自分を没し、解いて洗うことのできる最高の時間でした。

（クモがまったく登場しない感想文ですみません）。 9月10日



10月29日（火）7:00 p.m.より、パリオホール（JR水道橋駅下車）にて。  
中島晴子さんの和楽器の曲を集めたリサイタルが開かれます。御案内します（※）  
牧原伸一郎 & 牧原くみ子 ジョイントリサイタル 3000円  
”中島はるの世界” 問い合わせ 国際芸術連盟（TEL. 03-3356-4033）

《生物相調査さざま》 あまりのクモの少なさにタメ息も出ない 池田博明

横浜市が4年間かけて横浜市内の自然環境調査をした結果が美しい本になって発売された（1991年8月刊『ヨコハマ環境読本』発行は横浜市。1500円。県内書店で発売）。1986年から横浜市陸域の生物相・生態系調査委員会のメンバーが調査した結果である。

リストアップされた生物種は高等植物738種、鮮苔類54種、地衣類4種、キノコ196種、ほ乳類18種、鳥類83種、昆虫類564種、両生類8種、は虫類14種。それぞれ、なるほどと納得できる種数である（昆虫は若干少なめかな）。ところが、クモ類となると……30種！

なにかの間違いではないか。4年間の調査の結果である。南北二分した調査だから実質は2年間という。12の環境の調査結果である。もちろん森林もある。談話会員のみなさんなら、信じられないのではないだろうか。そんなに横浜市にはクモが少ないのかと驚かれる人もいるかもしれない。

結論を先に言おう。もちろん、これは調査がいい加減だったのである。それも並はずれたいい加減なのである。だいたい30種というのは私見では、神奈川県の場合、町なかの一軒の家の庭で一年間に観察できるクモの種数である。あるいは場所によっては一日の観察会で見られる種数である。それを具体的に説明してみたい。

ところで、この批判は、神奈川県の二宮町や大磯町、伊勢原市、大和市等でクモを調査している私自身にもはねかえってくることを承知で言うのである。

まずクモの調査を担当されたのは、○高校教諭（調査時は中学教諭）のJ氏である。氏の名前を御存知の方はほとんどいないと思う。ずっと以前、日本蜘蛛学会の会員だった方である。

調査はこの方がひとりでしたようである。横浜市は非常に面積が広く、環境も多様である。それをひとりでやってしまうのは土台無理な話である。それにJ氏は結構年配の教員である。体力的な制限もあって、多分ひとつのポイントを夏休みに一度、それも「見つけ取り」で、調査しただけであろう。それはリストアップされたクモを見れば検討がつく（まとまってないので拾い出してみた）。ところで、私はJ氏の境遇に決して同情などしてはいない。

カネコタケグモ、キシグエタケグモ、カネコタケグモ、ジグモ、ハクモの仲間、サラグモ、オホメグモ、ヒグモ、オカカグモ、  
ナガコカグモ、コガネグモ、オニグモ、オオニグモ、ゴミグモ、ヨツテゴミグモ、イエグモ、サマノミタマシ、ヤマヨリカグモ、  
シヨウカグモ、アシカグモ、オオシロカグモ、イワヒルシリグモ、カバキマチグモ、クサグモ、ヤマチグモ、サグモ、ウツキモリグモ、  
ワカバグモ、アリグモ、テニツツル江トリ、シラビゲル江トリ、以上31種類

さて、これを見ると、1年中いる種と夏期に目だつ種であることが分かるだろう。例えば春先にホンチとして、横浜を代表するネコハエトリもいないことになっているのである。晩春に目だつバラギヒメグモやアズマキシダグモも取られていない。それに、実際にあちらこちらで見かけ、都市化にクサグモより強いはずのコクサグモが記録されていないのはおかしい。J氏にはこの2種が識別できないのだろう。「見つけ取り」の限界で、徘徊性が少ないのも特徴的だ。

次にそんなに気合いをいれなくとも「見つけ取り」で見つかる、どこにでもいる種をあげてみたい（屋内性を除く）。みなさんは、どんなクモを指摘されるだろうか。

カツリウスグモ、マネグモ、ヒラタグモ、コウイグモ、アシフトヒグモ、パラキヒグモ、メボシヒグモ、ワキグモサマノミタマシ、  
カブトヨウグモ、スケロニグモ、コロカネグモ、ヤガタシナカグモ、ウガシナカグモ、セショウグモ、  
コクサグモ、メカキチグモ、ネコグモ、ハグモ、アシヒエビグモ、ネコ江トリ、マシジロ江トリ、コシタカグモ

ここで、横浜市内の調査の具体例をあげておこう。例えば1984年9月2日氷取沢市民の森で、クモの会観察会で見られた種数は48種（クモの会誌『トタテズグモ No.22』より）。1981年8月までの2年間で野庭高校周辺で採集された種数が127種（谷川明男、1982, Kishidaia, (48) より）。伝聞だが、山川守氏は保土ヶ谷区だけで200種以上を記録されているという。

種数だけでなく、この本にはクモに関するJ氏の解説的談話もある。これは裏話だが、印刷直前のJ氏の部分の草稿を熊田さんに見せていただいた（熊田さんもほとほと困っておられた）。なんと談話の内容はヒドい間違いだらけであった。クモの生活の説明なのだが、10行に1個は間違っている位だった。間違いの原因は初步的なものもあったが（例えば「クモは獲物の体液を吸う」などと語っていた！）、たいていは自分で確かめもせず、知りもしないことを、観察事実のことく語ることから来るものであった。徹底的にみんなで（熊田、池田、谷川）朱を入れてみた。出来上がったものはましになっているが、全部無視するわけにもいかず、なんとか格好をつけるのに最終的に谷川さんがだいぶ苦労されたと聞いている。私はもとの直しようもないほどの間違いを覚えているので、直しの苦労がよく分かった。

せっかく自然環境調査にクモを加えて下さったのだから、もう少し人を得て調査をして欲しかった。横浜・川崎には市内在住の適任者がたくさんいるのだから。次の機会には（それがあるかどうか分からぬのが）、もう少しましな結果を出したいものである。

この本のクモの部分だけは読まないことをお薦めする。

《日本蜘蛛学会鳥取大会》1991年8月30日（金）～31日（土）の2日間、鳥取市の白兎会館で日本蜘蛛学会の第27回大会が開かれました。吉倉真氏は懇親会の席上、「私が若い時と比べて、クモ学はたいして変わっておらず、あまり進歩していない。みなさん、いっそう頑張ってほしい」と話された。エクスカーションでは鳥取砂丘とイソコモリグモの観察。鳥取大学の鶴崎展巨氏、江原昭三氏を始め、鳥取・兵庫の学会員のみなさん、ありがとうございました。（※）

八木沼健夫博士、日本蜘蛛学会の名誉会員となられる  
今年の日本蜘蛛学会評議員会で、八木沼健夫博士が日本蜘蛛学会の名誉会員に推挙され、総会で満場一致で可決された。おめでとうございます。（※）

卓章[玉]より南宮山寛先生、来日される

8月24日（金）に韓国クモ研究所の南宮峻先生が来日されました。日本蜘蛛学会鳥取大会に参加されるついでに、韓国のクモと比較するために日本のクモの採集に来られたのです。成田空港へ到着されたのは南宮（Nam Kung）先生とクモ研究所を手つだっておられる大学生の鄭（Jung）さん。そ

れから鳥取までのお世話は新海栄一・小野辰嗣・熊田憲一・池田博明・谷川明男・貞元巳良の各氏で行いました。鳥取大会では韓国クモ研究所の金（Dr. Kim）所長夫妻や東國大学李（Dr. Lee）学長も加わって鶴崎氏はか事務局の方々にお世話になりました。鳥取大会以後は西川喜朗氏が案内して下さいました。東京では萱島泉氏、大阪ではハ木沼健夫氏とも懇談されました。

8月25日（土）の八王子城址での採集会（南宮・鄭・新海栄一・池田・佐藤幸子・高橋登・松浦祐司）では、キジロオヒキグモ（雄亜成体）が採れた他（新海氏発見）、オダカグモ・カネコトタグモ（松浦氏発見）も観察できました。韓国ではトタテグモの仲間が一種も記録されていないそうです。また、ヤチグモは共通種がシモフリヤチグモだけとのこと。別種とされているクモでも案外、同種のものがあるかもしれません。（※）

#### 《同定会の御案内》 クモの名前を知るポイントを教えます

神奈川県立青少年センター科学課では、一般公開の「ミクロの世界体験セミナー」の一環として、1992年3月1日（日）に「（小さな）クモの名前を調べるコツ」という催しを行います（担当は生物係の池田）。小型ではありませんが分類が難しいと言われているコモリグモ、フクログモ、ヤチグモ、ワシグモなどの他、ほんとに小さいサラグモ類、カラカラグモ、ヤマジグモ、いろんなクモの幼体まで、10台の実体顕微鏡で標本を観察します。

専門家向けの講座ではありません（専門家には講座なんて必要ありませんから）。参加なさりたい方は、あらかじめ電話で申し込んで下さい（当日飛び入り参加されることも可能ですが、立場上申し込みがない場合は準備ができませんので）。この催しは定員5名ということになっていますが、回りは何人でも受け付けます。一応10時から始まります。終了は3時ですが、遅く来て、早く帰られてもかまいません。実習時、「一瞬で野外のクモの名前が分かる！」（池田著、ちなみにこれは誇大広告です）という資料をさしあげます。なお、不適切な箇所はその場で訂正することにします。

参加申し込み先 〒220 横浜市西区紅葉ヶ丘9-1 神奈川県立青少年センター 科学課  
桜木町駅下車徒歩10分 電話 045-221-3131 内線 602 （科学課） ※

#### 《出版案内》 青木淳一 編著『日本産土壤動物検索図鑑』（東海大学出版会）

画期的な図入りの土壤動物検索図鑑が出た（1991年5月）。本会会員の方も執筆者に名を連ねておられる。豊富な土壤動物の同定がなかなかできなくて困っていた人にとっては待ちに待った図鑑である。ただし、クモに関しては種名の同定まではできない。科までである。まず、科の検索図が初めて図解で載っている。この部分は加村隆英博士のオリジナルで、価値が高いと思う。しかし、それに続く科単位のクモの背面全形図は、大半がハ木沼健夫氏の図鑑の改変図であり、せっかくの本図鑑（図説）のオリジナリティを減らしてしまっていると思った。

クモ以外では、これまで過小評価されていた分類群が大きく扱われているところが興味深い。クモに近いところでは、ザトウムシやカニムシ、ダニが扱われている。昆虫でもハエの幼虫や甲虫の幼虫、アリ、アザミウマ、ゴキブリといったところが扱われている。

さっそく土壤動物を調べたくなるような気にさせてくれる本である。値段は、15450円だが、著者のどなたか（佐藤英文、鶴崎辰臣、加村隆英、西川喜朗各氏）に頼めば割引価格で購入できるのではないか。※

#### 荒俣宏著『世界大博物図鑑 I 虫』（平凡社）

世界博物図鑑も、とうとう最後の配刊になった。刊行が始まったときに一番心配だったのは、全5巻が完結する前に荒俣氏が死亡するか、平凡社が倒産するのではないかということだった。無事最後の巻『蟲』まで刊行されたことを喜びたい。蟲というのは昆虫のことではない。ここでは陸生（一部海生もあり）の無セキツイ動物すべてを指す言葉である。もちろんクモも登場する。

クモに限らず、古今東西の傑作絵図が採録されている。ながめているだけでも楽しい本である。科学的な図として描かれたものが、いわく言い難いセンス・オブ・ワンダーを感じさせることがよ

く分かる。荒尾氏は最近『稀書自慢 紙の極楽』(中央公論社)という本集めの体験談を出版した。これも本好きにとっては、無類に面白い本である。蜘蛛学に関しても同様の趣向で、高橋登さんに書いて欲しいところだ。

ただし、この『蟲』のクモ篇については、日本に生息しない種の和名には問題がある。不適切な名になっているところがある。もっとも、それらは(標準)和名ではなく、訳名と考えればいいのだが、他にも例えばPisaura mirabilisの訳名がキタキシダグモになったり、フシギキシダグモになったりという不統一がある。それにしても、大変な労作である。※

### 関口見一著『カブトガニの不思議』(岩波新書) 10月発売

現在入手可能なカブトガニに関する一般書は、最近復刊された土屋圭示著『カブトガニの海』(誠文堂新光社)くらいだろうか。1970年代後半、汐文社から日本の野生動物シリーズの一巻として、関口見一著『三億年を生き続いたカブトガニ』が出るはずだったのに、このシリーズは途中で刊行停止してしまった。生きている化石の代表であるが、日本のカブトガニはいまや絶滅寸前である。談話会員で、ネイチャーシネプロの吉田嗣郎さんは今年から日本、アメリカ、東南アジアのカブトガニを撮影中で、一部は8月にTV放映された。撮影に当たっては、関口見一先生が指導・協力されていた。カブトガニは、NHKの地球ファミリーでも取り上げられた。鳥取の大会では関口先生はこの本のことはお話しにならなかったが、校正されていたとか。カブトガニの生物学に興味ある人が座右で参考にできる一般書を期待したい。発売されたらすぐに入手することをお薦めする。専門書には関口見一編『カブトガニの生物学』(サイエンスハウス)がある。※

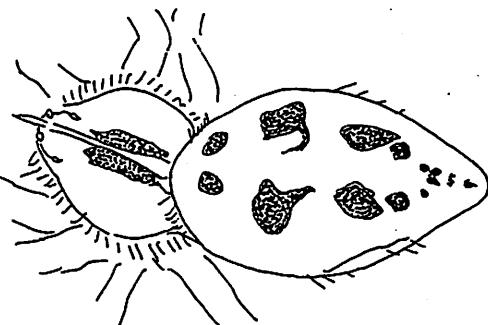
### 《ピビックス》アズマキシダグモの斑紋

変異個体

長井芳夫

1991年4月に平山にて撮影。このような斑紋はそう多くないそうで、編集子に恐れられて紹介します。

(写真から描図 IKEA)



### 《WATCHING》『私の家では○が使えないんです』クイズ・仰天くらべる(TBS)

9月12日(木) 7:30~8:00 PM

照明の効果で、突然不気味に萱場泉先生が登場。萱場先生の家で飼育しているクモが紹介され、最後に先生がクモを飼育しているために『私の家では○が使えないんです』と言う。この○を解答者が当てる。

解答者が挙げた答は殺虫剤とクーラー。正解はもちろん殺虫剤。

ところで、解答者で出演していた中村あづささんは小田原城内高校出身で、池田は彼女が1年生のときに生物を教えたことがあります。※

### 《WATCHING》『豆トカゲ博士』ファミリー東京(東京12ch) 9月19日(木) 9:00~9:30AM

豆トカゲ博士として、宮園あがさんが出演。あがさんと、トカゲの飼育の様子や飼育動物たちの生態、例えばジョロウグモが食べかすをポイ捨てるところや、カナヘビがクモを餌にしているところが放映されました。※

編集部からのお知らせ 原稿をお待ちしています。

□ 会誌編集: 〒223 神奈川県横浜市港北区新吉田町1523 谷川明男

□ 通信編集: 〒258 神奈川県足柄上郡大井町金手1099 池田博明

## ニューヨークのショットバーのマスター

新海 明

民宿あやめ荘のおばさんの暖かなもてなしで、心豊かに過ごした昨夜の余韻を残したまま明けた、合宿二日目（7月28日）の朝はあいにくの雨模様だった。朝、合流するはずの熊田さんを待って、午前中の採集地は民宿の裏手に広がる葦原とその先の裏山にのびた林道だった。例によって例のごとく、民宿を出た直後から観察や採集が始まり牛歩のごとく進む一行と、珍品を求めて足早に先を急ぐ一行とにまたたく間に別れてしまった。

牛歩の一行の一人であった私は、小澤さんと萩本さんが昨夜の観察会で調べたカバキコマチグモの葉の巻き方に興味をもち、葦原の葉をみつめていた。小澤さんによるとカバキコマチはススキやアシの葉に糸をつけて行ったり来たりするうちに、その糸の張力で次第に葉が曲げられていくとのことで、できたらその全過程を観察記録したいとのことであった。言われてみればそのような報告を私は一度も見たことがない。なんとなく「きっとこうなっているのだろう」と想像しているだけだった。どんなことでもいいから、きちんとした観察記録を残す必要性を改めておもい知らされた。そんなわけで、カバキコマチの作りかけの住居でもないものかと、あちこちを探していた。

暫く行くと少し前方を歩いていた加藤さんが、一頭のクモをみつけて皆を呼び集めた。それは、漆黒の地の腹部中央に一对のよく目立つ白斑を持ったヨツボシワシグモであった。これを見た小澤さんいわく「ニューヨークのショットバーのマスターみたいだなあ」。なるほど、そういわれてみれば黒のタキシードを着てその下に真っ白なワイシャツがのぞくバーテンダーを連想させられなくもない。その色彩、艶、毛並みといい実に何ともいえない優雅さを漂わせたクモである。小澤さんの例えに一同納得して再び見入ってしまった。ヨツボシワシグモの学名は *Kishidaia (キシダイア) albimaculata* であり、熊田さんによると、東京クモ談話会の合宿では必ずといってよいほど採れることのこと。何か因縁めいたものを感じさせられたものである。

空からは時折、小雨が舞降りてきたりでぱっとせず、採集品の方もこれといったもの特にあったわけではなかったが、民宿の裏山の小径での「小粋なマスター」との出会いは、今回の合宿の数ある思い出のなかでも印象深く忘れ難いものの一つだった。

事務局（会計を含む）〒221 神奈川県横浜市神奈川区片倉町199 熊田 憲一  
領収証の必要な方は振替用紙通信欄にその旨お書きください。

訂正・変更等がありましたらお早めに事務局熊田までご連絡下さい。

## ”名行司”・前川隆敏さんのこと

池田博明

今年（1991年）のこどもの日に、私の勤務する青少年センターでは、横浜ホンチ保存会（会長・佐藤芳夫さん）の方々に協力を頼って、科学教室『クモ合戦・ホンチ遊び』を催した。横浜こども植物園でも行っているほんち遊び教室の真似である。よいものは大いに真似をしようというのが、私の考えだ。ただし、先行の方に礼を尽くすことが必要であろう。

さて、ホンチ（ネコハエトリの雄）の合戦は、二枚のパレサ板を使用して開けた場所で行う。保存会の前川隆敏さんが二頭のホンチを板の上に出す。闘う機会を作るために板と板を近付ける。一方のホンチがジャンプして戦いが始まる。ホンチが前川さんの差し出す板の方にとび、みごとなホンチ芸である。ホンチの扱いのあまりのみごとさに私は感動した。

何例も見ているうちに私は自分の間違いに気がついた。その間違いは「負けたホンチは必ず闘争意欲をなくす」ということである。誰もそんな風には言っていたなかったのかもしれない。実際に闘うホンチを見ていると、いったん逃げた方のホンチが数秒後に再び同じ相手と出会ったときに、果敢に戦いをいどみ、勝ってしまうケースもときどきあるのである。こうなるとどっちを勝ちと判定してよいか、分からぬ。そこで行司役が必要である。前川さんはホンチを闘わせる名人であると共に名行司なのである。

私は催しの後、薄いペニヤ板を切り、小さな合戦用板（いわば土俵）を作って、ホンチをその板の上に出し、クモノ扱い方を練習した。しばらくするうちに、うまく合戦させることができようになつたではないか！ホンチの行動もある程度予想することができるようになった。さっそく私はセンター2階の展示場にいて、来館者に得意顔でクモ合戦を見せてあげたのである。いよいよ大道芸人に近づいた！

その後も前川さんに会う機会を得たが、扱いかたは圧倒的に前川さんがうまいのである。クモノ気持ちがわかるんだと言われば信じてしまいそうなくらいである。無形文化財に指定してほしいとさえ思う。私も勝手に弟子を自称して、精進に努めることにしたい。前川さんはホンチだけではなく、ハエトリグモ一般、ひいてはクモノことをよくご存知である。それはホンチ遊び30年のキャリアだけではない。ナチュラリストとしての目の確かさにあると私は思う。

横浜ホンチ保存会で出している『ホンチ』という会誌に前川さんが書かれた「脱皮の観察」にはホンチの成長と斑紋変異のことが（なんとこの問題は既に前川さんにより研究されて解決してしまっていたのだ！）、「ホンチの飼育」にはクモノ病的症状のことが書かれている。ここではこの「ホンチの飼育」を許可を得て転載するが、これを見ると前川さんをクモノお医者さんと呼んでも過言ではないと思われる。なお、読者の方が引用するときにはきちんと『ほんち』からのものであることを断わって下さいね。

ほかにもハエトリグモの行動研究で著名なニュージーランドのジャクソン博士でさえ、気がついでいるような前川さんの大発見はいろいろあるのだが、その内容は論文にして、発表していただくことになっているので、それが出たときに改めて紹介したいと思っている。

ところで、神奈川県横浜市でのネコハエトリの出現のピークはオスが4月下旬、メスが5月上旬くらいと推定しているのだが、もっと南方、例えば紀伊半島や九州地方では、どうなっているのだろうか。以前に齊藤慎一郎さんが、《日本列島ネコハエトリ前線》を夢想しておられたが、なんとかそれを作成したいものである。

情報をお持ちの方はお教え下さい。

ところで、前川さんや齊藤さんが編集に加わり、横浜市こども植物園が発行した傑作冊子『教材植物マニュアル3 横浜の自然とホンチ遊びの研究』（B5判、28頁）を希望の方には送料負担でおわけします。好評のため、横浜こども植物園には1冊も無くなってしまいました。日本蜘蛛学会鳥取大会で有料頒布（送料分250円+大会事務局寄付50円。送料分はこども植物園に寄附済み）した残りが、池田の所に若干あります。欲しい人は「ホンチ遊びの研究送れ」と書いて、切手250円分を池田まで送って下さい。先着順12名さまに限らせていただきます。

## ホンチの食事 前川隆敏

採集してきたホンチが、元気で長く生きてくれることは、とっても嬉しいことです。すぐに弱らせてしまつてはホンチが可愛そうです。飼育と言っても成体であるホンチの場合、基本的には餌や水を十分に与えていれば、元気でいてくれると言つてよいでしょう。ただし、5月中旬以降は気温が高くなりますので、涼しい場所に移した方がよいと思います。弱らせてしまう場合のほとんどが、容器からの出し入れや、戦わせる時などの扱い方によることが多いようです。手でつかもうしたり、箱へ入れる際に脚をはさんだり・・・etc。これらはホンチの身になって考えてあければすぐに納得の出来ることです。

ホンチにとって8本の脚は、とても大切なものです。住居の中で脚を左右交互に整えながら休んでいるところを見れば、このクモが、いかに脚を大切にしているかがうかがえるのではないでしょうか。あの雄姿を支えている舞台裏を見るようです。他のハエトリグモと比べるとこの点が際立っているように思えるのですが。ひいき目でしょうか。

ここで、飼育していてよく見かける、ケガや病的な症状について表にしてみました。

症 状	原 因 その他の
① 第1脚の蹠節と脛節が直角状に曲がったままの状態になる	ホンチ同志の闘争のときになることが多い
② 牙が欠けてしまう	闘争や捕食のときのケガ。両方欠けてしまうと捕食出来ない
③ 牙が開いたままになつてしまふ	両方とも開いてしまうと餌を捕えても食べることが出来ない
④ 口から透明な、うすい褐色の液体を出す	餌を食べた後などに、口からこの液を出し、一時的に弱つてしまう。時間とともに元気になる場合が多いが、これを何度も繰り返すようだと、やがて餌を食べなくなり弱って死に至る場合もある。
⑤ 排泄器官が詰まる	排泄する動作をするのだが、数日のうちに死んでしまう。
⑥ 麻酔された状態になる	ハチ類などにさされたもの。まったく動かず、2週間程は体も柔らかく、生きているようだが、やがて死んでしまう。
⑦ 赤いダニがついている	死ぬことはないようだが、出来れば針などで取つてあげたい。

さて、次に、家庭でいつでも与えられる餌はないものだろうかと考え、牛乳と砂糖水で実験してみました。

【牛乳】50匹程のうち約6割が飲んでくれるのですが、この場合、飲むと言っても下顎と下唇に半固体の状態で一旦ためて、後に口外消化をして吸収するという具合。ハエなどの血液に比べて濃いせいか、消化までにかなりの時間がかかり、また、お腹が大きくなるほど飲んではくれませんでした。水で薄めても結局、余分な水分をよけて下唇にためるので結果は同じであった。牛乳は自然

な状態で接するように与えるタイミングがむずかしい。

【砂糖水】牛乳に比べてクセがないせいか、ほとんどのホンチがよく飲んでくれました。人間の舌で少し甘いと感じる程度が一番良いようです。すぐ近くに一滴たらしてあげると、臭いを感じるのかホンチの方から寄って来ます。飲みっぷりも牛乳と違つて、お腹が大きくなるまで飲んでくれました。しかし、何日か経過するうちに以前ほどがむしゃらに飲んではくれなくなりました。それでも一ヶ月程度は十分に生きていてくれました。ハエや蚊が捕れない時の代用にはなりそうです。

そのほか、牛乳と砂糖水にレモンなどを入れてみたところ、どうも酸っぱいのは好きではないらしく、まったく飲んでくれませんでした。

以上の実験で砂糖水は代用になりそうですが、出来ればタンパク質類でよいものがあればと思っています。

【ホンチの寿命について】数年前、2匹のホンチにハエや蚊を与えて買っていたところ、9月の上～中旬まで生きていました。その頃は誰にも信じてもらえないだろうと思っていましたが、齊藤（慎一郎）先生の飼育事例にもあるというお話を聞き、保存会に理解者がいたということで感激しました。

寿命というのは、卵から脱皮した時期、あるいは、成体であるホンチになった時期などに関係があるのかどうか。また、メスとの交接の有無による差異、その他、同じ条件で飼育していても個体差も十分考えられますので、むずかしい問題ですが大変興味深いものがあります。昆虫などの事例等も参考になるかもしれません。

『ほんち』（横浜ホンチ保存会会誌）1984年、(9):4-6.（通し頁では68-70）

## △会員移動

### (入会)

木村 正吾	〒424 静岡県清水市折戸5-5-25	シバタアパート101	
横山 和正	〒520 滋賀県大津市平津2-5-1	滋賀大学教育学部生物研究室	0775-37-0081
畠守 有紀	〒914 福井県敦賀市松島町6-4-1		0770-22-2840
井野 文雄	〒156 東京都世田谷区弦巻1-37-9		03-3706-5419
上原 健	〒143 東京都大田区東海3-1 東京港野鳥公園		
大塚 昭彦	〒157 東京都世田谷区成城8-30-5 成城北フラツツ103		03-3482-7387
山本 一幸	〒669-67 兵庫県美方郡浜坂町久斗山628		07968-5-0118
北島 博	〒305 茨城県稻敷郡茎崎町松の里1 森林総合研究所 昆虫管理研究室		
有田 立身	〒680-11 烏取県烏取市猪子199		
本庄 四郎	〒669-62 兵庫県城崎郡竹野町和田340		0796-47-1041
入江 照雄	〒861-12 熊本県菊池郡泗水町吉富250 県立菊池農業高等学校		0968-38-2621
井原 庸	〒731-01 広島県広島市安佐南区八木5丁目27-13-203		
宮園あがさ	〒181 東京都三鷹市下連雀7-8-22 アリガ三鷹ハイツ305		0422-47-3114
細田みどり	〒658 兵庫県神戸市東灘区岡本7-3-24-203		
木庭 奏	〒861-05 熊本県山鹿市大字南嶋826-1		

### (住所変更)

萩本 房枝	〒226 神奈川県横浜市緑区江田東2-4-8	045-942-7572
新海 明	〒190 東京都立川市錦町3-12-16-1010	0425-22-2605
牧 孝匡	〒323 栃木県小山市神鳥谷934-7-206	0285-22-7630
貞元 已良	〒272-01 千葉県市川市富浜2-7-13 アネックス富浜405号	0473-56-9322

### (退会)

松本 公一（希望退会）

# 会計だより 郵便振替口座 東京 7-74885 東京蜘蛛学会

会費受領  
会費又領

1991年5月～ (敬称は省略させていただきます)  
1991年9月中旬 (一般2800円・学生2000円)

1990年(平成2年)度

笠原須磨生A132・松本 公一A140・西條 雄介A145.

1991年(平成3年)度

池田 泉A114・池田 千洋A115・池田 博明A116・木村 正吾A117・千国安之輔A118・大石 洋人A119・  
本木 洋子A120・谷川 明男A121・田副 幸子A122・横山 和正A123・畠守 有紀A124・井野 文雄A125・  
須賀 瑛文A126・小滝 一孝A127・小池 牧子A128・永井 均A129・大熊千代子A130・諏訪 哲夫A131・  
笠原須磨生A132・磯部 達男A133・山川 守A134・長井 芳夫A135・中平 清A136・中島 晴子A137・  
石野田辰夫A138・松田まゆみA139・加藤旗代子A141・板倉 泰弘A142・萱嶋 泉A143・林 俊夫A144・  
西條 雄介A145・中島 祥吉A146・大野 正男A147・近藤 昭夫A148・貝発 憲治A149・上原 健A150・  
加藤むつみA151・阿部代始子A152・大塚 昭彦A154・中井 恒夫A157・牧 孝匡A158・吉田 真A160・  
関口 晃一A161・吉倉 真A162・山本 一幸A163・西川 喜朗A164・北島 博A166・有田 立身A167・  
本庄 四郎A168・入江 照雄A169・井原 康A170・宮園あがさA171・細田みどりA172・木庭 奏A173.

1992年(平成4年)度

小池 牧子A128・磯部 達男A133・石野田辰夫A138・山本 一博A153・高田 勝A155・立川 晴二A156・  
牧 孝匡A158・鈴木 勝浩A159・関口 晃一A161・大熊千代子A165.

1993年(平成5年)度

大熊千代子A165.

寄付

大石 洋人氏  
小滝 一孝氏  
石野田辰夫氏

○会費の問い合わせには受付番号(A000)を明記  
してください。

バックナンバー代領収

木庭 奏様・日本蜘蛛学会鳥取大会参加者様。

会費の納入状況につきましては、宛名氏名に記入してある年号を御覧下さい。記入してある年号まで会費が  
納入されております(1991年9月中旬現在)。会費は前納制ですので、まだの方はお早めに納入をお願い  
します。

## バックナンバーについて

バックナンバーについては先の通信でお知らせしておりましたが、会費相応が望ましいとの意見により、下  
記のごとく代金の変更を致します。( )内は会員への代金です。

通常号 1000円(800円) 特別号・企画号 2000円(1600円)

バックナンバーは40号以降になりますが、残部の少ないものもあります。



1991年8月31日発行 日本クモ学会第23回大会事務局



## お知らせ

## 参加者[追加]

李 海浜、鄭 哲熙、小川百合枝

## ご寄付拝受

関口晃一・八木沼健夫・大熊千代子  
松本誠治

1991年(平成3年) 8月31日(土曜日)

全国版 三 新聞

第11回

小型のガ。幼虫は体長二〇—三〇ミリ。雑食性で茶、ササンカなどの葉を食べます。

茶の葉を食い荒らす害虫「チャハマキ」を最もよく捕食するクモは、フクログモ科のクモ「寄草原」である。茶畠でこのクモを殺さないようにすれば、農薬の使用を減らせることができます。

野に広く見られる。国内には約八十種。ヤマトフクロクモ、トビイロフクロクモなど。

茶の葉を食べ、チャハマキを捕食してくれるかを判断する。

十六種のクモ計五百六十六種を採集。消化器まで観察して、茶畠でこのクモのたんぱく質を調べ、チャハマキを殺す力があるかないかを判定した。



国見・東京農工大助教授

# 農業減らしは天敵のクモで

東京農工大助教授  
一番の働き手発見

出来るところ。研究結果は三十日、鳥取市で開かれていた「日本蜘蛛(ハエ)学会」の大會で発表する。チャハマキの天敵がクモだということは知られていましたが、分からなかった。

この結果、フクロクモ科のクモが、春の一時期を除いて他のクモを大きく引き離していた。

從来の「化学農業」が古

定した。この捕食率で、クモのいる密度を掛け合わせた数字で比較した。

この結果、フクロクモ科のクモが、春の一時期を除いて他のクモを大きく引き離していた。

これまでの「化学農業」が古

定した。この結果、フクロクモ科のクモが、春の一時期を除いて他のクモを大きく引き離していた。

これまでの「化学農業」が古

定した。この結果、フクロクモ科のクモが、春の一時期を除いて他のクモを大きく引き離していた。

これまでの「化学農業」が古

定した。この結果、フクロクモ科のクモが、春の一時期を除いて他のクモを大きく引き離していた。

これまでの「化学農業」が古

定した。この結果、フクロクモ科のクモが、春の一時期を除いて他のクモを大きく引き離していた。





1991年8月31日発行 日本クモ学会第23回大会事務局

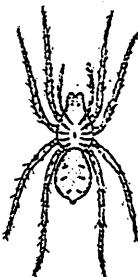
1991年(平成3年)8月31日(土曜日)(22)

山陰中央新報

## 鳥取砂丘独自のクモが生息

# 緑化進めば絶滅?

インコモリクモ



日本蜘蛛学会で報告する  
小野辰嗣国立科学博物館動物  
研究部研究官=鳥取市未広  
温泉町、白兎会館



小野研究官は同日の研究  
発表で「インコモリクモの  
分布と新産地」と題して、  
分布は日本だけなら鳥取県  
と北海道の個体群異は  
ない。鳥取砂丘を限って、  
北海道まで日本海側の砂丘  
を中心に生息している日本  
特産のクモ。大正十四年、  
新潟県で初めて確認され  
た。

## 蜘蛛学会で報告 鳥取

日本蜘蛛学会(くも)学会の第23回大会が三十日、鳥取市内で始まり、国立科学博物館動物研究部の小野辰嗣研究官が、鳥取砂丘からインコモリクモ(学名リコーサイシカラヤマ)は「地域のものでは別種の可能性がある」と、砂丘独特の種類であるとの研究結果を報告。併せて「同砂丘の草原化が進むほど、(このクモは)絶滅の恐れがある」と警笛した。

この中で、二年前に採集した北海道と鳥取砂丘の雌を比較したところ、生殖器の突起の形が北海道のものは丸くなっていたが、鳥取のものは丸くなっていた。  
と説明。「新潟でも北海道と同じ形態を持つていて、それが確認されており、鳥取砂丘のものだけが変異体か  
な。鳥取砂丘を限って、

鳥取砂丘で草原化が進んでいたことについて、「インコモリクモは砂丘によって限られることはない」と指摘した。

報告の後、同研究官は鳥取砂丘で草原化が進んでいたことについて、「インコモリクモは砂丘によって限られることはない」と指摘した。鳥取砂丘を現地撮影しては、大会最終日の三十一日には、鳥取砂丘の生態を観察する。研究者についての同学会に注目している。植物が伸びれば生長場所も環境が破壊されるので、鳥取砂丘のインコモリクモは絶滅する危険がある。その意味で、草原化防止の試みとしている。すくんである場所の適地を指摘した。

大学などの研究機関と民間研究者についての同学会に注目している。植物が伸びれば生長場所も環境が破壊されるので、鳥

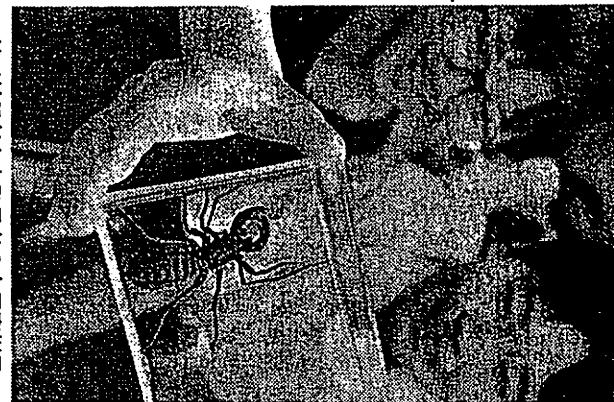
金言

卷四

平成3年(1991年)6月4日

卷之三

八木昭健夫氏  
提供(3点)



平成3年(1991年)6月4日

火曜日

# 中華人民共和国憲法

近畿初、学会に報告へ  
中神学・東灘で

(右) 田中宏幸二郎大村國吉中  
理學博士の西日本新聞社  
中野区本郷三丁目二二番地  
口に報生

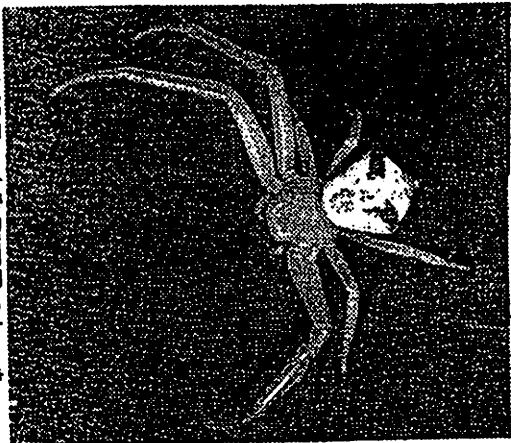
# 神戸新開(少利)

企 西川喜朗氏提供

日刊スポーツ 1990.6.21(木)

この日は朝、大黒千代子氏がアラカルト・ビーンズ(筑紫系TV)。

1990.6.23.

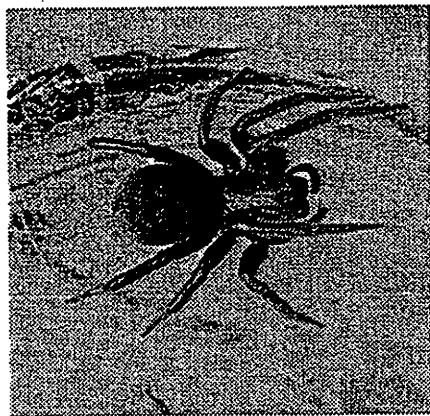


佐賀県・大和町で見つかった

今度は「人面ヲ」。福岡大和町で見つかった。これは北九州分野と(1)。  
九州大和郡の義理に太  
よどじのうさは二モ  
亦へ来まつた平家の藤がへり  
いのー朝。奥の藤が成る  
きじゆかが人の頭やへり  
にじらとなんばーて現れる  
の、人面ヲ、が佐賀県佐賀  
のが特徴。



兵庫県城崎郡日高町江原で見つかった  
帰化種のクロガケシグモ



▼ 神戸新聞 (1991.1.10)

オーストラリア原産の帰化種で、近畿・瀬戸内海沿い周辺の数ヵ所でしか生息が確認されていない「クロガケシグモ」が、兵庫県城崎郡日高町江原にまで勢力を拡大している。九日まで、日本クモ学会全国で同都野野町公民館主催の本庄西郎さんによる調査で分かった。物流など人為的な作用で生態域を拡大している可能性が高く、生野跨越、して日本海側にまで進出してこられたとするだけに、注目を集めている。但馬の生態、分布状況をさらに詳しく調べ、鳴取市で七月に開かれた同クモ学会で発表する。

江原での存在が分かったのは昨年九月。クモ類の分布調査に訪れた本庄さんが、民家の庭木にいるのを見つけた。体長が六ミリほどのなかつたため、持て帰って調べ、四五回の脱皮の末、成体になつたといいでクロガケシグモと確認した。

クロガケシグモは昭和三十八年、東大阪市西部（当時の布施市）で日本で初めて発見された。その後、クモの専門学者が大阪市東南部とその近郊奈良県・斑鳩町・和歌山県・すみれ町・兵庫県加西市で確認。本庄さんは同年十月、兵庫県篠山市夢前町・塙田温

日本海側で初めて確認？

最近の神社で成体一匹が見付かっている。

（3-1-30 65-1）

小原店  
クロガケシグモ

クロガケシグモ  
体長一・二ミリ。全身上軟毛が密生し、全体としては灰黒色に見える。オーストラリア南部、ニュージーランド、タスマニアに分布。世界共通種。現在、このクモだけが、オーストラリア域と日本だけにしかおらず、特異な存在として注目されている。

# 海を渡って 山越えて

## 瀬戸内海から但馬へ、じわり勢力拡大

これがどの経過か、日本の分布域は、原産地のオーストラリアの気候に似た興南部あたり、まだ正確な範囲でないだけに、今回の日本海側での発見は、予想外。「生活力が強く、長期の飢餓にも耐えるが、活発に移動するクモではなく、人為的に運ばれてきたと思われる。その後の調査で、多數が室戸内などでも見付かっており、かなり前からいたらしい」と推測。「この通りは人と物の流通が盛んなため、荷物などにまぎれ込んで運ばれてきたなど、さまざまな移動経路を考えられる。また、新しい環境での勢力拡大、在来種との関係も調べたい」と興味は尽きない。

クロガケシグモを日本で初めて確認したクモ学の大豪、八木沼傳夫（延岡門学園大学名譽教授）は、「本庄さんの報告で、「このクモの分布が新たに広がった。但馬に勢力を拡大しつづけるのか、これまで存在に気づかなかつただけなのかは議論の分かれるところだが、赤道を越え、北半球の同じく熱帯（の）ごく暖かい環境の日本に上陸、人為的に運搬（の）ごと運ばれ、新天地で勢力を拡大しているのだろう」と話している。



# 一生懸命にクモの糸

彼は今でも朝の運転手で、メカニカルな技術を磨いていた。彼はメカニカルの技術も発達して、そんなメカニカルが必要としなくなつたが、彼はカツとしてそれがまだやまびしだが、いた。会社のながらも、風姿が美しいといつて、かわねいだ。ただ、このじつは親しい友人はいなかった。

彼はなぜかクルマが大好きだった。何回車の車体が種々入れられて、パートの部屋に貼がつていた。彼は「風景記」で有名な「アーブル」を数えていた。そのなかでも「アーブルのクロスカントリー」が最新といって、常に眺めている。しかし、この車の内装は、少しずつ古めにはなつて、

彼は今でも牛乳さんの腰のよきはメガネをかけている。最近はメガネの技術も発達してそんなメガネは必要としなくなったが、彼はガンとしてそれを手はなすとはしない。会社のながら一風変わった者としてあいかわれば、それで、これといった親しみはないがつた。

から古の友人からである。内容は結婚式の案内状だった。田無様の彼をやめて結婚したのは誰かと思いた。「これが間違ひのものだのだ。友人の結婚式はつがなく進んでいた。突然、司会者が彼の席にやってきて三分ほどどのペローチをお願いした、といふ事だ。時間があまりたので友人からのたつてのうの花束を手渡す。」  
「花束を手渡す」と云ふが、そのように裏返して書いたのである。結婚は得意のウチの田無由紀子だらしかねなかった。」「なぜだ？」  
「ショロウが申す所であつて、よくお墨聚帳で見るのは誰かだなたそれであつまつて、そのケモノの名は直條芳一だ。百貨店の一派らしい結婚式場であつたので、イヤヤ、16回結婚式のショロウが

高知新聞  
1991年(平成3年)8月17日(土曜日)



「エー私の話せるテーマは  
ただひとつでして…